

法文学部五十年史

読破の薦め！

川崎 淳一 (31年・文学科卒業)

朝の歯磨きをしながら、鏡を覗き込んだら、何と老いたる顔、齢81歳「あたりき」ではあるものの思わずのけぞった。その昔、紅顔の美童？と言われた面影はどこへやら。そりゃそうだ、同窓会事務局に申し込んでおいた「法文学部五十年史」を入手し、その内容の面白さに取り付かれて、夜が白むまで読み耽った報いである、と強弁したい。で、「そんなにイケてる50年史なのかい」との問いがあるならば、次のような事で応じましょう。

年史は、冒頭からドラマティックである。

市内・長田町の民家に発生した火災(昭和27年4月24日夜半)の延焼で、鶴丸城趾にあった一般教養部校舎が消滅、文理学部は一夜にして約1億3000万円の甚大な被害を蒙った。だが、教職員、学生の協力で5月6日には授業再開に漕ぎつけた。この火災が機縁となり、文理学部は学舎を教養部のそれと統合、歴史ある7高以来の地を離れて、市内鴨池町(現、郡元地区)に移転する。

あらまし以上のような序章以降、文理から法文へという学部変遷に伴い、ヒト(教職員と学生数)、モノ(大学施設)、カネ(財源)などにまつわる悲喜こもごものストーリーが繰り広げられていく。法文学部半世紀の歩みと現状(学部・大学院人文社会科学研究所)の説明を裏付ける資料も付記してあるが、年史の興趣を盛り上げるのは、教職員、卒業生、在学生ら諸賢の回想記である。

70年安保をめぐる鹿大全共闘と大学当局の紛争発生(昭和43~45年)という一項は、混沌とした時流を映しだしているが、加えて、この時の警察機動隊導入を目撃した南日本新聞記者、高嶺欽一氏(昭和34年卒、文理・社会学科)の事件活写もさすがである。ことの顛末はともかく、安保改定粉砕というスローガンの下で発生した全国規模のデモ、火炎瓶、ゲバ棒などによる騒乱は、地方の国立大にも波及、鹿大もその埒外ではなかった。

27年4月の一般教養学舎と旧7高寮の炎上から3年後の昭和30年、唐湊の台地に新設された学生自治寮「望岳寮」での暮らしを懐かしく語る幾人かの卒業生。金欠のため少量の焼酎を飲んだ後、全力疾走で飲酒の効率を高めたという。浜辺で焚いた火の周りを禪一丁で踊りまくる、いわゆるファイヤーストームも青春発散の決め技だった。「一般教養部の寮だから、文理、教育、農学、水産など縦割り学部の壁を超えた学寮生活は格別な味わいであった」と、文理・社会学科を昭和34年に卒業した谷口義弘、森田義孝の両氏。7高に入学し新制鹿大に移行後、8年の留年期間ぎりぎりまで居座った「牢名主」おっと失礼、「寮名主」がいたが、その名物オッサンと同宿できた感激が忘れられないと、これまた笑える体験談だ。

「教室でいつ果てるともない議論の後、繁華街の天文館に繰り出し、焼酎を中にまたも談論風発。それはもう、自由闊達な人文的精神の交わりというべきシンポジオンであった」と解説す

る池田紘一氏(昭和54年、鹿大文学科に着任、九州大学名誉教授)。「偏屈で内気な男子学生たちが、オーストリア出身の外人教師、ヨハンナ・マティアゼック女史に誘われて、磯公園の芝生の上で、照れながらもいつの間にか手足を動かし、ワルツを踊ったシーンが眼に浮かぶ。それは映画サウンド オブ ミュージックのマリア先生を彷彿させ、役を演じたジュリー・アンドリュースそっくりだった」と話を継ぐ。ちなみに池田氏は、鹿大人文学科の独語・独文学教室の担任を38〜48歳まで勤めた際、任期3年のマティアゼック女史と同僚教師という間柄。教授会で禁煙動議があったというエピソードも、結末やいかにと引き込まれる文脈だ。

以上、五十年史からほんのちょっぴり話題を拾い上げたが、同窓会組織の動向も含めた年史は、過去の事実検証にとどまらず、未来展望の踏み台となる一冊であろうかと推察します。申すまでもなく、人文社会科学系学部が扱う思想、歴史、文学、言語、心理、社会といった分野は、人間精神を深く考察し、幅広い人間育成を目標とするリベラルアーツの領域であります。これを、経済的価値には縁遠い学問だと非難する功利性重視派の昨今の声は、断固打ち砕かねばならないと思います。「五十年史読破の薦め」なる檄文には、こうした意味も込めたつもりです。「北辰斜めにさす」心意気で、老体の妄言をお許しください。